

■コロナ後の新しい流れへの対応

I コロナ後の価値観の提示

今回、新型コロナウイルスへの感染という未曾有の経験は社会生活や人々の価値観に様々な変化をもたらした。感染リスクが高まる中でも、医療・介護やライフラインなど人々の生活を支えるために働くエッセンシャルワーカーへの、人々の感謝の気持ちが高まったのもコロナ禍の特長である。個人レベルで見ると、日常生活での身近な人々との交流の制限は、ごく当たり前であった人とのつながりの大切さを改めて認識させた。大都会での窮屈な暮らしから、自然に恵まれ人と人とのつながりを大切にす地方の暮らしを改めて見直す意識変革の契機ともなった。組織レベルでは、心身の健康を周囲の環境とともに良好に保つウェルビーイングの向上と持続化がより重視されるようにもなった。

一方で、デジタル技術の活用も一気に進展し、「オンライン化とリアル融合」が会議形式に急速に浸透し、イベント開催方式にも導入されるなど各方面で普及が加速した。また、リモートワークの定着は、大都市にあったオフィスの地方移転など経済活動の分散と多極化を推進し、地方の活性化にも貢献し始めている。

コロナ禍での密を回避する中で、大人数を対象とはせず、本物を志向する一定の層のみを対象としたビジネス、関心の深い層のみを対象にしたイベントなど、少人数を対象に高い付加価値を提供する動きも顕在化してきている。

II コロナ禍での文化力の再認識(閉塞感の打破)

コロナ禍での行動制限は、当然、文化・芸術活動にも影響を及ぼした。美術館の休館、劇場の催し中止をはじめ、種々の活動が停止を余儀なくされた。この間、アーティストはリアルな活動が出来ず、その受け手である観る側の閉塞感も高まった。が、その一方で長引いた「巣籠り生活」は文化・芸術が日常生活を送る上でいかに重要なものであるかを再認識させることにもなり、そんな中で新たな取り組みも生まれた。

美術館、博物館では企画展をオンライン上で解説付きで開催。劇場の公演もオンラインで配信するなど、デジタル技術活用の動きが広まり、送り手と受け手の間で新たなコンタクト方法が開拓された。言い換えると、オンラインを活用した試みが新たな集客方法を開拓する結果となった。

オンラインを通しての文化・芸術活動の発信は、コロナ禍に日常の不自由を強いられていた人々にも少なからず感動を与え、閉塞感の打破に貢献した筈である。文化・芸術活動の新たな可能性が生まれたとも言えよう。

III 行動様式の変化を考慮し、事業でも躊躇なく対応

新型コロナウイルスによる感染症が国内にも広がり始めた頃、当協会では予定していたリアル形式のディスカッションをオンライン形式で開催する方式に変更した。大阪、奈良、兵庫の三府県で5カ所を結び、ライブ中継と後日、収録版を配信する方法を併用した。まだ、世間にオンラインセミナーが十分に普及していなかった頃、ホールでのリアル開催が難しくなり、いち早く開催方式を変更したものである。

コロナ禍への否応なき対応を迫られたとはいえ、それは今後にも通ずる貴重な教訓となった。突然の状況変化による新たな流れを見極め、必要に応じて事業計画に反映させる。新たな行動様式を受容し、事業の意

義、内容、進め方を臨機応変に、時に大胆に変化させていく。長年の組織の蓄積を土台として尊重しながらも、時代環境、行動様式の変化に沿った対応は過去にも経験してきた。今回のコロナ禍で改めて再認識し、引き続き実践していかなければならない。

一方で、今後も新たな感染症や大規模災害といった予期せぬ事態が起こり得る。そういった時こそ人々を元気づけ、力を与える文化・芸術が必要である。今回のコロナ禍を教訓とし、平常時から未知のリスクに備えた文化・芸術活動を維持するための体制整備が求められる。国連が提唱したSDG'sにより、世界にさまざまな課題と目標が提示された。文化・芸術が、これらの目標を達成するために継続的かつフレキシブルに役割を果たしていかなければならない。